インフィニットストラトス～英雄達此処に集う

鉄槌の騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニットストラトス～英雄達此処に集う

【Ｎコード】

Ｎ５０８９Ｘ

【作者名】

鉄槌の騎士

【あらすじ】

Ｃ．Ｅ．七八　九月

ザフトとオーブ連合首長国の会談の為、来たカガリ、アスラン、迎えにきたキラ、シン、ルナマリア、ラクスは丸い白い光に飲み込まれてしまった。そして、ついた世界は…

エピローグ（前書き）

新しく書き直しました。

エピローグ

C．E．七八　九月

一隻の輸送艦が、宇宙に出て来た。輸送艦の名は「クサナギ」オーブ軍が所有する戦艦であり輸送艦でもある。

艦内にはザフト軍、オーブ連合首長国の六人の少年少女が乗っていた。ザフトから「キラ・ヤマト」「シン・アスカ」「ルナマリア・ホーク」「ラクス・クライン」オーブ連合首長国からは、「カガリ・ユラ・アスハ」「アスラン・ザラ」が乗っていた。久々に挨拶をしていた時に、突然緊急アラートが鳴り響いた。

『クサナギ』より

「カガリ様皆さん、直ぐに格納庫に行ってください。」

キラ達は、状況が全く読めなかった。もう、戦争は終わった筈なのに…

『早くしないと手遅れになります。どうか、早くお逃げください。』

悲痛な声だけが、ロビーに響いた。キラ達は、直ぐに格納庫に行き、自分の愛嬌に乗り込んだ。

キラはストライクフリーダム、アスランはインフィニットジャスティス、シンはデスティニー、ルナマリアはザクウォーリアに、カガリはアカツキ、ラクスはかつてキラが愛用したフリーダムに乗り込んだ。

「クサナギ」艦橋より

『ハッチ解放ストライクフリーダム発進どうぞ！』オペレーターから発進許可をもらった瞬間

「キラ・ヤマト、ストライクフリーダム行きます！」そして、六機のＭＳは、宇宙空間にでた瞬間に、丸い白い光に包まれてしまい、レーダーにも写らなくなってしまったのであった……

〈ＩＳ学園〉職員室
「織斑先生、あのニュースをご覧になられましたか？」
「あぁ、見た。しかし、あの一夏がＩＳを動かしてしまうとは…姉として信じがたい」
職員室で話していたのは、元日本代表候補生だった山田真耶と元日本代表の織斑千冬の二人だ。そして、一夏と言われたのは、千冬の実の弟で、女性にしか反応しないＩＳを初めて動かした男でもある。
千冬達が静かな時間を過ごしていた時、緊急アラートが鳴った。
『織斑先生、山田先生。直ぐに第一アリーナに向かって下さい。侵入者の反応がしました。数は、六。急いでください』
千冬達は、ラファールリヴァイ、打鉄に乗り込み、第一アリーナに向かった。

千冬達が、第一アリーナに到着した時、そこには、六人の人間が倒れていた。千冬達は、武器を出してゆっくり降りた。
そして、倒れている人間は、気絶をしているのかピクリとも動かなかった。
千冬と真耶は、六人の側に行った。
（これは、なにかのパイロットスーツか？しかし、見たことの無いパイロットスーツだ。）
「山田先生、一度調べましょう。」
そう言って、千冬はパイロットスーツの首の部分にボタンがあるのに気付いた。ボタンを、押したときヘルメットが外れた。そこには、まだ１６～１７才ぐらいの少年がいた。そして、全員のヘルメットを外すことが出来た。男女六人の顔があり、しかも、それぞれＩＳを持っていた。千冬達は、六人を保健室に連れて行った。
〈ＩＳ学園〉保健室

「んっ、此処は…何処だろう？」
一番先に起きたのは、キラだった。キラは、皆を起こした。そして、皆が起きた時、保健室の扉が開いた。
「やっと目覚めたか。」
「貴方は？」
キラは、少し警戒しながら聞いた。
「私か？私はこのＩＳ学園の教師をしている織斑千冬だ」
キラは、初めて聞いたＩＳを千冬に聞いた。
「織斑さん、そのＩＳとはなんですか？」キラの質問に驚いたように
「ＩＳを知らんのか？」
キラ達は、首を横に振った。
「僕達は、ＭＳに乗っていました。」
「なんだそのＭＳとやらは？」
逆に、キラ達が驚いた。そして、キラ、アスラン、シン、ラクス、ルナマリア、カガリは少し話しをして
「織斑さん、もしかしたら僕達は、異世界から来た人間かも知れません。」
千冬は、全く意味が分からなかった。
そして、キラは、Ｃ．Ｅ．についてを話した。千冬は、この世界についてを話した。
そして、千冬は一度保健室を出た。

「アスラン、まさか僕達は本当に異世界に来てしまったのかも知れない。」
キラは、アスランに話した。
「あぁ、今は、それしか無いな…しかし、まさか俺達が異世界に来てしまうとは」アスランは、元気が無いように言った。
その後、キラ、アスラン、シン、カガリ、ラクス、ルナマリアは一日中話しをして眠った。

次の日
キラ達は、何時もの癖で早く起きた。時刻は6時。しかし、早く起きたキラ達は、千冬が来るまでの間ずっとこれからの事についてを話した。
「皆、僕達は今は一文無しで家も無い。ましてや国籍も無い状態だ。これからどうしようか？」
「あぁ、逆に何も無いのは清々しいくらいだな」
キラ達は、ずっと落ち込んでいた。程なくして、保健室の扉が開き、千冬ともうひとりの女性が来た。
「起きたか、しかし全員早起きだな。」
「まぁ、癖みたいなものですから」
千冬とキラが話した。シンは、少し気になったのか、もうひとりの女性について千冬に聞いた。
「すみません、隣の方は誰ですか？」
「あぁ、そうだ。こちらは、私と同じ教師の山田先生だ」
「はじめまして、山田真耶です。よろしくお願いします」
キラ達は、自分達の自己紹介をした。
「さて、これからについてを話す。お前達六人は、このＩＳ学園に入学してもらう。学費は無料、生活環境もある。全て政府が、出してくれることになった。」
それを聞いたキラ達は
「しかし、ＩＳは女性にしか反応しない筈では？カガリやラクス、ルナマリアは良しとして、僕達三人も入学することになるんですか？」
「もし、入学した際、俺達三人は情報を採られる。」
「解剖は、されない筈」
「やはり、お前達は頭が良いみたいだな、そうだ、そしてこれがお

前達が持っていたＩＳだ。右からストライクフリーダム、インフィニットジャスティ、デスティニー、アカツキ、ザクウォーリア、フリーダムだ。お前達のかは、分かるか？」
キラ達は、自分達が乗っていたＭＳの名前と同じＩＳを手にした。
キラ達が手にした瞬間、頭に自分達が乗っていたＭＳの装甲、武装が手に取るようにわかった。
「では、この服に着替えろ」
千冬が渡してきたのは、パイロットスーツではなく、軍服だった。しかもキラ、シン、ルナマリアについては、フェイスのバッチがついていた。ラクスは、議員の黒い服、カガリは、オーブの首相の服、アスランはオーブ軍の軍服を渡された。キラ達は、軍服に着替え千冬について行った。

〈ＩＳ学園〉バトルアリーナ
「今から、模擬戦をしてもらう。それぞれのＩＳを起動しろ」
キラ達は、自分達の機体を呼び出した。「まずは、ヤマトから行け」
「わかりました。」
キラは、ストライクフリーダムを呼び出した。キラは、ストライクフリーダムに包まれた。さすがの千冬も驚いた。
「全身装甲〈フルスキン〉だと。」
千冬と真耶は、驚いた。なぜなら、ＩＳは絶対防御があるため全身装甲は要らないのだ。そして、千冬は後の五人も同じ全身装甲を持っているとわかった。
『カタパルト接続、ストライクフリーダム発進どうぞ。』
「キラ・ヤマト、ストライクフリーダム行きます！」
キラは、バトルアリーナの中に入った。
『では、山田先生と模擬戦をしてもらう良いな。』
「はい」
そこに、山田先生が乗るラファールリヴァイヴが来た。
「ヤマト君よろしく」

そして、試合開始の合図が鳴った瞬間、キラは、ドラグーンを一気に出し、自分もビームライフルで攻撃をした。
「えぇ、誘導攻撃機を制御しながら自分も攻撃をして来るなんてどんな能力ですか？」
山田先生は、驚いた。しかし、キラは山田先生の攻撃を避けようとはしず受けに行った。しかし、シールドエネルギーは減らなかった。なぜなら、核エンジンを搭載し、現在はリミッターも無し。今ストライクフリーダムに勝つ為には、ビーム兵器しか効かない。そのため、キラによる一方的な攻撃を受け山田先生は、敗北した。
その後、アスラン、カガリ、ラクス、シン、ルナマリア達も模擬戦をした。しかし、全員シールドはひとつも減ることは無かった。

〈ＩＳ学園〉保健室
「まさか、シールドが減らないとは、思いもしなかった。」
千冬と真耶は、キラ達と談笑していた。
「リミッターがあれば、攻撃は効くはずです。」
そして、リミッターを付けた状態取での戦いを三ヶ月間行った。
その間に、国際免許を取得した。キラは日産スカイラインの青色でＭＴをアスランはトヨタスープラの赤でＭＴをシンはＣ．Ｅ．で乗っていた赤いバイクを買った。キラ達は、入学に必要な道具を買い、キラは、パソコン、コーヒースタンド、豆等を買い、アスランは機械メンテナンスブック、工具を揃えた。シンはＣＤを買った。そして、入学前日は、千冬から渡された厚さ五？はあるかぐらいの本を読んでいた。その日は、ずっと本を読むだけに使った。

エピローグ（後書き）

次回は、ＩＳ学園に入学します。次回もお楽しみに、

誤字脱字が、あったら教えてください。

第一話（前書き）

ＩＳ学園に入学します。

第一話

〈ＩＳ学園〉１年１組

「ねぇ、アスラン。僕達六人同じクラスだけど、大丈夫かな？」

「大丈夫だろ、しかも、全員バラバラだったら、情報が纏まらないだろ」

アスランとキラは、心配だった。なぜなら、ＩＳ学園は、女子校で全世界の女性が集まる。そんな中に男が三人しかも専用機持ち。女子にとっては、格好のエサだ。しかし、幸いにも、織斑先生の弟も一緒のクラスだと言うことは同士が一人でも多いと心強い。

そして、キラの隣にはラクスが、アスランの隣にはカガリが、シンの隣にはルナマリアが座った。しかも全員後ろの席だった。キラ達六人は山田先生と織斑先生が来るまで談笑していた。

「えっと、全員揃ってますねー。それじゃあＳＨＲ始めます。」と山田先生が話す…しかし全員、山田先生の話しは耳に入っいなかった。何故なら、一番前には一人目の男子、後ろには四人の男子が座っているためだからだ。山田先生は、オロオロしながら「そ、それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」と言った。

そこで、山田先生は自己紹介をするよう促した。あ行に始まりシンから自己紹介をした。

「シン・アスカです。よろしくお願いします」

すると、女子から「き、きゃぁぁぁぁぁぁ」と黄色い声援が弾いた。

「一人目の男子」「強気のある男子」「美形」

シンは、たじろいだ。その横でルナマリアは、シンのことを睨み付けた。

次は、カガリの番だ。「カガリ・ユラ・アスハだ。よろしく」

また黄色い声援が、弾いた。

「き、きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」「二人目の男子」「シン君もそうだけど、強気の男子」「美形」すると、アスランは、苦笑いをした。なぜなら、カガリは男子用制服を着ているため、男子に見えたのだろう。カガリは怒りながら「私は、女だぁぁぁ！」と叫んだ。すると、女子の間に驚きの声が響いた。男子に間違えられるのは当たり前、なぜなら、カガリは、スカートが苦手なのだ。だから、織斑先生に無理を言って男子用制服を着ているのだ。

次に一夏の番になった。

「織斑一夏です。よろしくお願いします。」これまた女子の間に黄色い声援が響いた。「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」「テレビ見たよ」「テレビよりカッコイイ」「クールでイケメン」一夏もたじろぐ。窓際の女子が、一夏を睨んだのは間違いないだろう。四人目はラクスだ

「ラクス・クラインですわ。どうかよろしくお願いしますわ」女子は、何処のお嬢様かと思ってしまった。五人目はアスランの番

「アスラン・ザラだ。よろしくお願いします」再び黄色い声援が響いた

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」「超クール」「美形」「大人っぽい」と続いた。カガリは、物凄く不機嫌になった。六人目はルナマリア

「ルナマリア・ホークです。隣のシン・アスカ君の彼女です。」と爆発発言をした。すると女子の間に嘆きの声が響いた。最後はキラ

「キラ・ヤマトです。どうか皆さんよろしくお願いします。」また黄色い声援に教室が揺れた。「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」「四人目の男子」「美形」「優しそう」キラは、たじろいだ。黄色い声援が止んだ瞬間教室の扉が開き千冬が入って来た。すると、女子の黄色い声援が響いた。「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

「千冬様よ」「本物よ」「ずっとファンでした」千冬は、かなり欝陶しそうな顔をした。

「……毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心させら

れる。それともなにか？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」
これがポーズでなく、本当に欝陶しがっている。しかし、それを聞いた女子は
「きゃぁぁぁぁ！お姉様！もっと叱って！罵って！」「でも時には優しくして～！」キラ達（一夏を除いて）六人は、女子がこんなに元気だとは思いもしなかった。千冬は、女子を黙らせてから
「さぁ、ＳＨＲは終わりだ。諸君にはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基礎動作は半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」
そして、そのまま授業に入った。
「――――であるからして、ＩＳの基本的な運用は現時点で国会の認証が必要であり、枠内を逸脱したＩＳ運用をした場合は、刑法によって罰せられ――」
すらすらと教科書を読んでいく山田先生。すると、山田先生は
「此処までで、分からない人はいますか？」と教室内を見渡した。すると、山田先生は、一夏と目が合い「織斑君、何か分からないことはありますか？」と聞いた。すると一夏が
「先生……ほとんどわかりません」
「え、えっと……全部、ですか……？」
すると山田先生は「織斑君以外で、今の段階で分からないって人はどれくらいいますか？」
挙手を促す山田先生、しかし
シーン……
一夏が何故？と言う顔をしたため織斑先生が聞いた。
「織斑、入学前に渡した参考書は、どうした」
「古い電話帳と間違えて捨てました」
織斑先生は、手にしている出席簿で一夏の頭を叩いた。
「馬鹿者、必読と書いていただろが。ヤマト、ＩＳ学園について答

えろ」
「はい、ＩＳ学園とは、ＩＳの操縦者育成を目的とした教育機関であり、その運用及び資金調達には原則として日本国が行う義務を負う。ただし、当機関で得られた技術は協定参加国の共有財産として公開する義務があり、また黙秘、隠蔽を行う権利は日本国にはない。また当機関内におけるいかなる問題にも日本国は公正に介入し、協定参加国全体が理解でき解決をすることを義務づける。また入学に際しては協定参加国の国籍を持つものには無条件に門戸を開き、また日本国っの生活を保障すること」キラは、すらすら言えた。前日にずっと読んでいれば誰でも覚えている。
「では、ザラ。ＩＳの世代について答えろ」
「はい、ＩＳは第一世代から第三世代まであります。現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているＩＳですが、その中心たるコアを作る技術は一切開示されていません。現在世界中にあるＩＳ４６７機、そのすべての篠ノ之博士が作成したもので、これらは完全なブラックボックスと化しており、未だ博士以外はコアを作れない状況にあります。しかし博士はコアを一定数以上を作ることを拒絶しており、各国家・企業・組織・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行っています。」
アスランもすらすら言えた。
「次、アスカ。取引について答えろ」
「はい、またコアを取引することはアラスカ条約第七項に抵触し、すべての状況下で禁止されています。」
シンも言えた。
「織斑、わかったか？」
「何となく…」
一夏は、曖昧に答えた。
その時に、授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。
「それでは、一旦終了する。次もあるから遅れないように。後、織斑。授業についてはヤマト、ザラ、アスカに聞くように。男子であ

ったら捗るだろ。ヤマト、ザラ、アスカ。こいつを頼んだ」
「はい」
キラ、アスラン、シンは千冬に返事をした。

休み時間
「はじめまして、キラヤマトです」「アスランザラだ」「シンアスカだ」
キラ達三人は一夏に自己紹介をした。
「あぁ、はじめましてだな。織斑一夏だよろしく。ヤマトにザラにアスカ。俺の事は、一夏と呼んでくれ。お前達も名前で呼ぶから」
「わかった」と三人は、答えた。
「なんだ、お前達。もうダチになったのか」とカガリ達三人が来た。
「ホークさんだっけ？本当にシンの彼女なのか？」
「そうよ」
ルナマリアは簡潔に答えた。
「ところで、アスハさんは女子用の制服を着てないんだ？」
「私は、スカートが嫌いなんだ。だからズボンを履いている」
カガリも、不機嫌に答えた。するとそこに「ちょっとよろしくて？」と何処かのお嬢様風に行った女子生徒が現れた。
「へ？」とこれまた男子四人がハモった。
「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話し掛けられるだけでも光栄なのですから、それ相当の態度というものがあるんではないのでしょうか？」
いかにも、今の女子という感じの女子生徒。
「悪いな。俺、君が誰なのか知らないし」
キラがすかさずフォローに入る
「一夏、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットさんだよ」
「なぁ、キラ。代表候補ってすごいのか？」と聞く一夏。それを聞いた女子一同は、コケそうになる。キラは、まいったなという顔をし、アスランは呆れ顔、シンは、ルナマリアと話しをしていた。

「そう！代表候補生すなわちエリートなのですわ」
「そうか、それはラッキーだ」
「うん」
「あぁ」
「そうだな」
と棒読みで答える三人。カガリ達三人はただ聞いていた。
「……馬鹿にしてますの？ふん、まぁでも？わたくしは優秀ですから、貴方達のような人間にも優しくしてあげますわよ。それに、ヤマトさん達以上にＩＳについて知っていますし、唯一、入試で教官を倒したエリート中のエリートですから」
「入試って、あれか？ＩＳを動かして戦うやつか？」
「それ以外に入試などありませんわ」
「あれ？俺も倒したぞ、教官」
「僕も、一方的だったけど」
「俺も」
「俺もだ」
「は……？わ、わたくしだけと聞きましたが？」
「それは、女子ではってオチじゃないのか？」
「貴方方も教官を倒した言うの！？」
「えーと、落ち着けよ。な？」
「こ、これが落ち着いていられ――」
授業の始まりの合図が鳴った。
「話しの続きは、また後で。逃げないで下さいね！よくって！？」
次の授業は、山田先生ではなく織斑先生が教壇に立っていた。
「三時限目は、クラス対抗戦に出る候補を決める。クラス代表と言ったところだな。一度決まると一年間は変更は出来ないが、自薦他薦は問わない。誰かいないか？」
「はい、織斑君を推薦します」
「えっ！おれか？じゃ、キラかアスラン、シンを推薦します」
キラ達は、まさか自分達が選ばれるとは思いもしなかった。

「納得がいきませんわ」
机を叩くと同時に声がした。キラ達はもしやと思い、声がした方を見た。声をあげたのはセシリアオルコットだった。
「大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ましてや、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては堪え難い苦痛で――――」セシリアがそこまで言った時三人の声があがった。
「あら、イギリスもたいしたことの無い国ではわなくて？」
「あぁ、自慢は余りないはず」
「それに、世界一マズイ料理で何年覇者だ？」
ラクス、ルナマリア、カガリの声だ。キラ達の友達が侮辱されることに腹を立てたのだ。
「あっ、あっ、貴方方ねぇ！わたくしの祖国を侮辱しますの？」
「先に侮辱をしたのは、セシリアさんだけど？」キラがフォローに入る。
セシリアは怒ってキラに「決闘ですわ！」と言っていた。
「オルコット、ヤマトに挑むとは命知らずらしいな。ヤマト、この決闘は、一夏がやってもいいか？」
「なっ、織斑先生！何故ヤマトさんとの決闘が出来ないのですか？」
セシリアは、女子が男子に勝って当たり前と思っている。
「オルコット、ヤマトを倒すには、ザラかアスカしか無理だ。山田先生でも勝てなかったからな」
それを聞いてセシリアは、ムキになり
「織斑先生、わたくしが勝つに決まっています。ですからヤマトさんと決闘させてください」
それに対し、カガリがキレた。
「セシリアオルコット、いい加減にしろよ？お前では、キラには勝てない。なにがあっても。リミッターを掛けても勝てない」
「貴方は、ヤマトさんとなんの関係がありますの？」
「私は、キラの姉だ。双子のな」

それを聞いた女子一同は、驚きの声をあげた。
「オルコット、アスハに勝ったら、ヤマトと戦え。それで文句は無いだろ。そして、織斑。お前はザラと戦え。アスカは出るか？」
「出たく無いです。アスランと当たりたくないし、もしキラさんと当たったら一たまりもありませんし」
「そうか…では、オルコット対アスハ、織斑対ザラの決闘を行う。時刻は、来週の月曜日。放課後に行う。いいな」
話しが終わった時チャイムが鳴った。

第一話（後書き）

セシリアありがとう。そしてさようならだ。次回、セシリア対カガリが戦います。お楽しみに

第二話（前書き）

セシリアさようならだ。

第二話

決闘の日
キラとラクス、シン、ルナマリア、アスラン、カガリは第一アリーナにやってきた。
「カガリ、大丈夫？アカツキの武装は大丈夫？」
こんな一方的にキラがカガリに話し掛けていた。
「あぁ！もう！キラ五月蝿いぞ！集中が出来ないじゃないか」
キラはすごすごと下がる。アリーナの端っこでキラは膝を抱えていた。カガリはキラを励まし、立たせた。
『カタパルト接続。ＯＲＢ‐０１アカツキ発進どうぞ！』
オペレーターの声のもと、カガリは
「カガリ・ユラ・アスハだ。アカツキ出るぞ！」と、カタパルトデッキから、射出される。
（なんですの、そのＩＳは！黄金のＩＳ、しかも全身装甲〈フルスキン〉だなんて。でもわたくしが勝つのは当たり前ですわ…）
「あら？逃げずに来ましたのね」
セシリアが使用しているＩＳは〈ブルーティアーズ〉第三世代型のＩＳだ。そして、セシリアの手には、スターライトＭＫ‐？のスナイパーライフルが握られていた。
「最後のチャンスをあげますわ」
「チャンスって？」
「わたくしが一方的に勝利を得るのは白明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今此処で謝るというのなら、許してあげないこともなくってよ」
「それは、チャンスとは言わないな」
「そう？残念ですわ。それなら――お別れですわね！」
そう言うとセシリアは、ライフルのトリガーを弾いた。カガリは、余裕の如く初弾を避けた。セシリアは、カガリの動きに苛立ち立て

続けにライフルを撃った。しかし、カガリは全てを避けた。そんな攻防が続き、セシリアはＢＴシステムを四機出した。カガリは、アカツキのオオワシ装備からシラヌイ装備に換装した。
「換装型のＩＳなんて始めてみましたわ、しかし、わたしくの前では無用ですわ」
しかしカガリの目に変化があった。ハイライトが消え無表情になっていた。
「私も本気で行かせてもらう！」カガリは、ドラグーン七機を出した。そして自分もライフルで撃ちに出た。
「まさか！誘導兵器を動かしながら自分も攻撃をするなんて人間離れしているにも限度がありますわよ」
そして、セシリアのＢＴシステムはカガリのドラグーンによって破壊された。その間たったの十秒。
セシリアは、ライフルで最大出力の威力を撃った。カガリは、一瞬目を見開いたが、ワンオフ・アビリティー（ヤタノカガミ）を発動させた。その結果、レーザーは、アカツキに当たったがセシリアに帰って来る結果になった。
「レーザーを跳ね返すなんて、ありえませんわ！ならこれではどうですか？」セシリアはピットの下からミサイル二機を出し攻撃をした。カガリは、シラヌイからオオワシに換装し腰のレールガンでミサイルを撃ち落とした。カガリは、ビームサーベルを展開しセシリアを斬った。そこでセシリアのエネルギーがゼロを示したのだった。カガリは、セシリアがゼロになった瞬間、セシリアの手をとった。そのままゆっくり地面に降りた。
「負けましたわ、カガリさん次の試合は、勝ってくださいな」
セシリアは、男に負けるのは嫌いだが、女性なら大丈夫らしい。
「キラが相手だと勝てないな…」
弱気なカガリをみて、ショックを受けた。
（カガリさん以上の人間なんていますのかしら？）
セシリアは知らなくて当然だが、Ｃ．Ｅ．時代にいた頃のキラは世

界最強。ましてや、フリーダムからストライクフリーダムに変わったら誰一人傷を付けれないほどの実力を持っている。アスランやシンは掠る程度だが。

アスラン対一夏

同じくして、アスラン達の試合になった。一夏と箒以外のキラ、カガリ、ラクス、シン、ルナマリアが集まった。

「アスラン。手加減をするつもりなのか？」

カガリは、心配そうに聞いた。

「ない。真剣勝負に手を抜いたらいけないだろ？」

アスランは、本気に戦うつもりらしい。カガリは一夏が哀れに感じた。

『カタパルト接続。Ｘ１９Ａインフィニットジャスティス発進どうぞ！』

「アスラン・ザラ、ジャスティスでる！」

アスランもまたカタパルトデッキから出た。

「アスラン、本気で行くからな」

「あぁ、何時でも来い！」

一夏は、名前不明の接近ブレードを出しアスランに立ち向かった。

アスランもビームサーベルを連結させ攻防に出た。

「アスランはやっぱり強いな」

「いや、俺よりもキラが最強だ」

一夏は信じられなかった。こんなに強いアスランよりあの優しそうなキラが最強とは思えなかった。アスランは、ファトゥム０１で一夏を攻撃した。一夏にファトゥムが当たる前に一夏のＩＳに変化がおきた。急に光り出し、光が消え去った時には、一夏のＩＳ〈白式〉がファースト・シフトになった為だ。

「やはりか…一夏、本気でこい。全力全開で！」

アスランは一夏に勝たしてキラと戦わせようと思っていた。そして、

一夏の接近ブレードの名前が付けられた。〈雪片弐型〉元千冬が使っていた武器の二号機らしい。一夏は、零落白夜を発動しアスランを斬った。そして、アスランは負けた。
「なぁ。アスラン？最後は手加減をしたろ？」と聞く一夏。
「まぁーな、次はキラかカガリのどちらかが一夏と戦うことになるが、油断をするなよ。確実にキラだから」
「なんで？」
「キラが最強だからだ。戦ったらわかる」アスランが真剣に言ったので一夏はヒヤリとした。

〈カガリ対キラ〉
どちらも、誰も来ていなかった。何故ならば、キラ達が拒絶したからだ。
（カガリは、どんな戦法をするかな？オーブ軍首相の力見せてもらうよ）
キラは、ストライクフリーダムをカタパルトに乗せた時に思った。
（キラ、ザフト軍フェイス隊隊長の実力を見せてもらう）
『カタパルト接続Ｘ２０Ａストライクフリーダム発進どうぞ！』
『カタパルト接続ＯＲＢ－０１アカツキ発進どうぞ！』
「キラ・ヤマトフリーダム行きます！」
「カガリ・ユラ・アスハアカツキ出るぞ！」
キラとカガリは同時に出撃した。
「カガリ、初めて戦うね。最初から本気で行くから」
「キラ、来い」
しかし、二人とも動かなかった。相手の出方を読んで動けなかった。
しかし、キラとカガリは同時に攻撃をした。ビームライフル、ビームサーベル、ドラグーンなどを使用して戦った。しかし、二人とも無傷であった。観客は驚いた。
カガリは、腰のレールガンを撃つが余裕で避けられた。カガリはビームサーベルを持ち、キラもビームサーベルで戦い、最終的には、

キラが勝ったのであった。

キラ対一夏
最終決戦になった。一夏にはアスラン、カガリ、箒、セシリアがいた。キラのところにはラクス、シン、ルナマリアがいた。
「キラ、一夏さんは初めてなのですから手加減をしてくださいな」
と、哀れむように言うラクス。シンとルナマリアも頷いた。
「わかった…頑張ってみる。死なない程度にしておく」

『カタパルト接続、Ｘ２０Ａストライクフリーダム発進どうぞ！』
「キラヤマト、フリーダム行きます！」
キラは、カタパルトデッキから射出された。

同じ頃、一夏のカタパルトデッキでは、アスラン、カガリ、セシリア、箒が集まっていた。
「一夏、キラはもしかしたらもしかしたら手加減はしてくる筈だ。ラクスの説得によってな」
「さっきの試合を見てたけど、キラもすごいな。誘導兵器を扱いながら自分も攻撃をしてくるなんて…ありえない。まぁー、頑張ってみるわ。じゃぁ行って来る」

『カタパルト接続、白式発進どうぞ！』
（アスランやカガリ達が言ってたのを真似をしてみるか…）
「織斑一夏、白式行きます！」
一夏もカタパルトデッキを離れた。

「やぁ、一夏。始めようか？」
「その前に、キラ。手加減はしないでくれ。本気で来てくれないか

？」
まさかの一夏から手加減無用と言われたので、キラは心配をした。
でもＳＥＥＤ覚醒をしなければ、バレない筈と考えるキラ。
「わかった。じゃぁ一夏、本気で行くね！」
キラは、ドラグーン八枚を出して攻撃をした。一夏は何とか逃げるが、幾らかは当たってしまいシールドエネルギーが減らされてしまった。
（クソっ、キラに近づけないじゃないか、一かバチかやってみるか）
そう思った一夏は、キラのドラグーンを一機破壊した。キラは、少し驚いた。そして一夏は全部のドラグーンを破壊することが出来た。
「キラァァァ、行くぞォォォ」
一夏は、雪片弐型でキラを斬ろうとしたが、
『織斑一夏。シールドエネルギーゼロの為、キラ・ヤマトの勝利』
とアナウンスが入った。一夏は何故に？という顔をした。観客も分からなかった。アスラン、カガリ、ラクス、シン、ルナマリア、千冬だけがわかった。
キラは、イグニッションブーストとバレルロールをして逆に一夏を斬ったのであった。
そして、決闘はキラの勝利にて終了したのであった。

第二話（後書き）

キラが最終的に勝ちました。セシリアと一夏のフラグが……どっかで入れれば大丈夫だろう。
次回は、いよいよ実習に入ります。原作どうりにいけるようにします。

誤字脱字があれば教えてください。

第三話（前書き）

鈴と一夏の乱入者は、何にしよう

第三話

決闘の翌日、朝のＳＨＲ。山田先生はありえないことを言った。
「では、１年１組代表は織斑一夏君になりました。あ、一繋がりでいい感じですね！」
「先生、質問です」
「はい、織斑君」
「キラが、勝ったのになんで俺なんでしょうか？」
「それは、僕が辞退したからね。一夏」
キラが答えた。
「一夏は、まだＩＳに慣れてないし訓練が必要だからね。それに、織斑先生に言われたんだ『お前が代表になったら、誰一人勝てないから辞退しろ』ってね」
一夏は、心の中で千冬にキレた。

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット。試しに飛んでみせろ」
一夏はＩＳを起動するだけに五分を使ってしまい、千冬の出席簿が炸裂した。
「早くしろ。熟練したＩＳ操縦者は展開まで一秒と掛からないぞ」
急かされる一夏。
（来い、白式）
やっとＩＳを展開することが出来た。横には、もうセシリアがブルーティアーズを展開していた。
「よし、飛べ」
千冬に指示され、一夏とセシリアは急上昇した。
「何をやっている。スペック上の出力では白式の方が上だぞ」
千冬が叫んだ。

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索するほうが建設的でしてよ」
上空三十メートルで、一夏とセシリアは話しをしていた。しかし、いきなり通信回線から怒鳴り声が響く。『一夏っ！何時までそんなところにいる！早く降りてこい！』
箒が山田先生のインカムを奪っていた。しかし、後ろから千冬に拳骨を受けていた。
「織斑、オルコット、急降下と完全停止をやってみせろ。目標は地表から十センチだ」
「了解です。では一夏さん、お先に」
セシリアはそういうと地上におりた。下から歓声があがったところだと難無くクリアーしたらしい。
一夏が意識を集中し一気に地表へ……
ギュンッ――――――ズドォォンッ！！！
一夏は地表に着いたが、どちらかと言うと墜落した。
「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」
一夏は、地面とのキスを離した。
「次、ヤマト、ザラ、アスカＩＳを展開しろ」
「はい」キラ達三人は、ＩＳを展開した。現れたのは、グレーのＩＳ三機。キラ達は、思考制御でＯＳを展開した。するとグレーだった機体がカラーリングされた。
「綺麗…」「全身装甲（フルスキン）？」「カッコイイ…」女子一同は、感激の声をあげた。
「キラ・ヤマト、フリーダム、行きます！」「アスラン・ザラ、ジャスティス、出る！」「シン・アスカ、デスティニー、行きます！」
キラ達は、膝を屈伸しバネの要領で急上昇した。
（綺麗…、しかも無駄の無い動き方。決めましたわ）セシリアは、何か決めたようにガッツポーズをした。
「では、急降下をしろ。目標の地表は十センチ以下」それを聞いた

女子一同は、千冬の無理難題に驚いた。
「了解」
キラが先に行った。一気にトップスピードまで上げ地面に向かった。
女子一同（千冬、カガリ、ラクス、ルナマリア以外）は、キラが地面に激突したと思った。しかし、地表、二センチのところにキラはいた。次はアスランだ。アスランもキラ同様に地表、二センチのところにいた。最後はシンだが、キラやアスランに負けたくないために地表、一センチのところで止まろうとしたが、失敗し一夏の二の舞になった。一夏が空けた穴をもっと深く空けてしまった。
「馬鹿者がっ！また穴を空けてどうする！片付けは二人がしろっ！」
千冬がキレた。一夏とシンはうなだれ、キラ達を見たがそっぽを向かれルナマリアを見るも、カガリ、ラクスと楽しそうに話しをしていた。結局、一夏とシンの二人で片付けをした。
その夜、一夏のクラス代表を祝う会があるため、キラ達はザフト軍、オーブ軍の服に着替えた。そして、寮の食堂で一組の全員が集まっていた。そこに、キラ達六人が遅れて来た。
「みんな、ごめん。待った？」とキラが言ったが、女子一同は誰一人聞いていなかった。なぜなら、キラはザフトの白服にフェイスバッチがあり、シンとルナマリアは赤服にフェイスバッチ、ラクスは最高評議員の黒い服、カガリはオーブの制服に、アスランはオーブの軍服を着ていた。「キラ君とシン君、ルナマリアさんの服色違いだけど、バッチが同じだ…」「ラクスさんの服、カッコイイ…」「アスラン君の服もカッコイイ…」「カガリさんの服は凄く似合ってる…」
女子一同は、羨ましそうにキラ達を見ていた。気を取り直し
『というわけでっ！織斑君クラス代表決定おめでとう！』
パン、パンパーンとクラッカーが乱射される。一夏が真ん中に座り、両隣にキラとアスランが座りキラの隣はラクスが、アスランの横にカガリが座っていた。シンとルナマリアも隣同士に座っていた。一夏の前には箒、セシリアが座っていた。

「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生男子五人に特別インタビューしに来ました〜」
しかし、キラ以外の男子逃げていた。
「まぁーいいや。後で捕まえればいいだけだし。さぁ、織斑君！クラス代表になった感想をどうぞ！」
「まぁー、なんというか、がんぱります」
「えー、もっといいコメントちょうだいよ〜。まぁーいいや、適当に捏造するし。じゃ、セシリアちゃんもコメントちょうだい」
「わたくしは、カガリさんに負けてしまい――」
「あぁ、長そうだからいいや。適当に捏造しておくから。よし、カガリ君に惚れたからって」
カガリは背筋が冷える感じがした。
祭騒ぎは、十時過ぎまで続いた。

次の日
キラ達は、席に着くなりクラスメイトに話し掛けられた。
「キラ君達、おはよう！ねぇ、隣の二組にも転校生が来たらしいよ」
「転校生？こんな時期にか？」
アスランが聞いた。
「そう、なんでも中国代表候補生なんだってさ」
一夏も丁度来た。
「どうかしたか？」
キラは、二組に転校生が来たことを話した。
「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」
周りの女子一同は、首を横に振った。
「でも、今のところ専用機持ちは一組と四組だけだし、余裕だよ」
しかし、入口から声がした。
「――その情報、古いよ」
全員が入口を見た。そこにいたのはツインテールの女子だった。

第三話（後書き）

入口に現れた女子は、誰なのか、わかる人は分かるはず…

誤字脱字があれば教えてください。

第四話（前書き）

すこしありえないことをしますが、ご了承下さい。

第四話

C．E．七八　十月

宇宙に、三隻の戦艦がいた。一隻は「アークエンジェル」二隻目は「ミネルバ」三隻目は「エターナル」どれも以前の形と変わらずだが、エターナルは大気圏突入することが出来るようになった。ミネルバは、メサイヤ戦にて大破したがオーブが修理しザフトに還したのだった。

「アークエンジェル」艦長マリュー・ラミアスは、ザフト最高評議員のラクスとキラを捜すため、「エターナル」艦長アンドリュー・バルトフェルド、「ミネルバ」艦長アーサー・トラインと一緒にいた。

「あのお姫様が居なくなってから早くも一ヶ月が経っちまったな」

「えぇ、キラ君達との連絡も無いし、カガリさんからも連絡がないと心配ね」

「早くラクス様とキラ君を捜しましょう」

マリューとバルトフェルド、アーサーは通信をしていた。

「前方に巨大な重力磁場発生！だんだん、こちらに近づいて来ます！」

ミリアリアが切羽詰まった声でマリューに言った。

「後退する！面舵一杯」

マリューが指示を出す。

「駄目です！舵が効きません！」

アーノルドが叫んだ。

そして、アークエンジェル、エターナル、ミネルバ三隻は、巨大な重力磁場に飲み込まれてしまったのであった。

〈ＩＳ学園〉
「鈴……？お前、鈴か？」
一夏は、驚いたように言った。
「そうよ。中国代表候補生、風鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」
一瞬、間が空いた。
「何格好付けてるんだ？すげえ似合わないぞ」
「んなっ……！なんてこと言うのよ、アンタは！」
鈴が怒った。しかし、後ろから声を掛けられた。
「おい」
「なによ！」
鈴は振り返った瞬間、フリーズした。
「ち、千冬さん……」
千冬の出席簿アタックが炸裂した。
「織斑先生と呼べ。もうＳＨＲの時間だ。教室に戻れ、そして入口を塞ぐな、邪魔だ」
「す、すみません……」
鈴は何故か千冬にビビっていた。しかし、一夏を見て「また後で来るからね！逃げないでよ、一夏！」
千冬の喝が飛ぶ。
「さっさと戻れ」
「は、はいっ！」と言って猛ダッシュで二組に行った。
そしてまた一日が始まった。
授業中、セシリアと箒は集中することが出来なかったのは言うまでもないだろう。

昼食時、また鈴が来た。
「一夏、ご飯食べに行こっ！」
「あぁ」
一夏は鈴の元に行った。後ろでは、セシリアと箒が一夏を睨め付け

ていた。

「しっかし、いつ日本に帰ってきたんだ？いつ代表候補生になったんだ？」

一夏は鈴に質問の雨を降らした。しかし、鈴も負けていない。

「質問ばっかししないでよ。アンタこそ、何ＩＳ使ってるのよ。ニュースを見たときはびっくりしたじゃない」

一夏と鈴の会話が気に入らないのか、セシリアと箒は今か今かとタイミングを計っていた。やっと区切りが着いたのか一夏がご飯を食べようとしたときに聞いた。

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

箒の米噛みに青い血管を浮きあがらせ箒は聞いた。

「そうですわ！一夏さん、まさかこちらの方とつ、付き合ってらっしゃるの！」

とセシリアまでが、迫って来た。

「べ、べべ、別に付き合ってる訳じゃ…」

と赤くなる鈴。しかし、一夏の一言で違う意味で赤くなった。

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼なじみだよ」

鈴は、思いっきし一夏を睨み付けた。

その視線を感じたのか「なに、睨んでんだ？」と聞いた。

箒は「幼なじみ？」と怪訝そうな声で聞いた。一夏が箒達に話をしているのをキラ達六人が見ていた。

「なんか、平和だな」

キラ達は、此処までの平和を味わったことが無かった。戦争を経験し休んでもすぐに戦争が始まった。だからこの生活を壊したく無いとも思った。しかし、緊急アラートが学園に響いた。

『全生徒に告げます。直ぐシェルターに逃げてください。教員はＩＳ装備ランクＡ。繰り越す――』

キラ達は、千冬から特別許可をもらっているためシェルターに行かず、教員とともに管制塔に向かった。そこで、キラ達が見たものは

……かつて共に戦った戦艦だった。

第四話（後書き）

次回はアークエンジェルが出ます。（エターナル、ミネルバも出ます）サイズは、元の半分しかありませんが…

誤字脱字があれば教えてください。

第五話（前書き）

やっと決まった……

第五話

キラ達が管制塔に着いた時、キラ達は驚いた。千冬はキラ達に聞いた。
「ヤマト、あれを知ってるらしいな。教えろ」
「あれは僕達が元いた世界の戦艦です。白い戦艦は〈アークエンジェル〉ピンクは〈エターナル〉赤色の戦艦は〈ミネルバ〉です」
キラが説明をした。
千冬はマイクを持ち、戦艦に繋げた。
「こちらＩＳ学園、教師の織斑千冬だ。そちらについて聞きたい」
すると、戦艦側から音声が聞こえた。
『こちらオーブ連合首長国所属艦アークエンジェル、艦長のマリュー・ラミアスです』
キラ達は千冬からマイクを借りた。
「マリューさんですか？」
『その声はキラ君なの？！』
相手もびっくりしたような声がした。
「話しを聞きたいので、誘導に従ってください」
と千冬は戦艦に伝え、キラ達について来るように促した。
緊急アラートも解除された。

〈ＩＳ学園〉ドック
ＩＳ学園には、生徒の行き帰りのため、船のドックが用意されており、数は十個程ある。その内の五つは秘密ドックになっていた。秘密ドックに三隻の戦艦が入港した。
キラ達が着いた頃には戦艦のクルーが降りていた。ミネルバ以外は見知った顔だらけだった。
「マリューさん。お久しぶりです」とキラが駆け寄った。マリュー

もびっくりした顔だった。キラ達はアークエンジェル、エターナル、ミネルバに駆け寄り再会を喜んだ。周りの職員は訳が分からないという顔をしていたが千冬と真耶は事情を知っていたため一応わかっていた。
「立ち話もしんどい筈なので、こちらにどうぞ」と学園に案内した。学園はたちまち野次馬だらけになった。
「キラ君達は、いつこの世界に来たの？」とマリューが聞いた。
「二ヶ月前になります」
とキラが答えた。
そして、マリュー達が案内されたのは一年用の食堂だった。食堂の入口には一年から三年までが見に来ていた。その中のムウ・ラ・フラガが入口にいる女子生徒に手を振った。すると何人かの生徒は倒れてしまった。
「さて、挨拶からさせてもらう。ＩＳ学園教師織斑千冬だ」
「同じくＩＳ学園教師の山田真耶です」
「はじめまして、オーブ連合首長国所属艦アークエンジェル艦長マリュー・ラミアスです」
「同じくオーブ連合首長国所属艦アークエンジェル副艦ムウ・ラ・フラガだ」
「ザフト軍所属艦エターナル艦長アンドリュー・バルトフェルドだ」
「副艦のマーチン・ダコスタです」
「ザフト軍所属艦ミネルバ艦長アーサー・トラインです」
「副艦のディアッカ・エルスマンだ」
それぞれの自己紹介が終了した時には時刻は夕方の五時だった。千冬達の心遣いにより今日は事情聴取は無かった。その日はキラ達六人はそれぞれの船に一旦戻れることになった。

翌日の朝山田先生は、転校生が来たと言った。そして入って来たのは
「ディアッカ・エルスマンだ。よろしく」

「イザーク・ジュールだ。」
新しい男子に女子一同はメロメロになってしまった。
一方、マリュー達は千冬に連れられ事情聴取を受けていた。しかし、ある程度キラ達から聞いていたので大間かなことだけを聞いただけだった。
アークエンジェル、エターナル、ミネルバは現状保留となった。

クラス対抗戦になった。クラス対抗戦前の練習ではキラ達にシバかれた。その間に鈴と一夏は揉めたらしいがこの対抗戦で決着をつけることになった。
第三アリーナのカタパルトデッキにはキラ達六人以外に千冬、真耶、アークエンジェル、エターナル、ミネルバのクルーが集まっていた。
「一夏、鈴さんのＩＳだけど甲龍（シェンロン）と言って第三世代型のＩＳで特徴としては衝撃砲があり、弾が目に見えないのが厄介だけで他はいつもどうりにいけるはずだよ」とキラ、アスラン、シンが一夏に説明をしていた。
「まさかあの坊主達は、こんなことをしていたなんてすごいな」とムウとマリューが話しをしていた。
「じゃ、行って来るわ」
キラ達は激励の言葉を言った。
『カタパルト接続、白式発進どうぞ！』
ミリアリアが管制室に入っていた。
「織斑一夏、白式行きます！」と言って射出された。しかし、一夏の射出を見送りながらキラは嫌な予感がした。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」
「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねぇよ。全力で来い」
と一夏は鈴の申し出を断った。

「一応言っておくけど、ＩＳの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる。要は（殺さない程度にいたぶることは可能）なんだからね」
そして、試合開始のブザーが鳴った。
一夏は、鈴が撃った衝撃砲を避けた。
「ふうん。初弾を避けるなんてやるじゃない。けど、これならどう！」
鈴は立て続けに衝撃砲を撃った。一夏は避けるが何発かは当たっていた。そして一夏が鈴を斬ろうとした時、上からビーム砲が貫いた。そこにいたのは一つ目のＩＳが十機はいた。しかし、後ろから黒いＩＳが現れた。
キラ達はそのＩＳを見て焦った。なぜならばジンが三機、ディン二機、ゲイツ二機、ザク三機も現れた。キラ達は後ろのＩＳを見て呟いた……デストロイと

山田先生は、一夏とコンタクトを取ろうとするも一夏から拒まれる形となった。
「織斑先生、教師部隊を下げてください。じゃないと死人が出ます。だから早く！」キラは焦りながら言うとカタパルトデッキにいる六人と合流した。
「待てお前達。数が多すぎる。出撃は認めん」千冬がそう言うと、後ろからバルトフェルドとムウが千冬に言った。
「織斑先生だっけ…此処はこいつらに任せてもいいと思うな」
「あぁ、それに後ろのＩＳだっけ？表の二人には倒せん。だからこいつらを行かせた方がいいと思うけど」
一夏も鈴もシールドエネルギーが切れる前だ。だから千冬は決意した。
「六人に告げる。今からあのＩＳの確保の任務を与える。だから行って来い！」

「はい」
キラ達は非常階段から下りた。そして、ＩＳを展開した。キラ以外は一夏達の援護を任せられた。キラは一度上空にて他にいないか確認をしていた。すると下から『一夏！そんな雑魚に手間取ってどうする！早く倒せ！』箒が実況室で叫んだ。するとジンが箒の前に現れマシンガンを向けた。しかし、マシンガンの弾は撃たれず、ジンの右手が宙に飛んだ。
「なんか狙ってたな」
「肝を冷やしたぞ」
『キラ』
そこには、キラの乗るストライクフリーダムが降りて来た。
しかし、一夏の周りにも敵ＩＳに囲まれてしまっていた。すると、周りのＩＳの顔、武装等が一瞬で撃たれ落ちて行った。入れ代わりに来たのはアスランだった。
「一夏、大丈夫か？」
「なんとかな」
「お前はすぐにピットに戻れ」
一夏は、下がろうとはしなかった。
「ダチを置いて逃げれるわけ無いだろうが」
アスランは一夏に喝を入れた。
「馬鹿野郎！死にたくなければ早く逃げろ！」
一夏は渋々ピットに戻った。
鈴の周りにもＩＳがおり、攻撃するもすべて避けられてしまった。
しかし、下からのビーム砲で全機破壊された。
「鈴さん、大丈夫ですか？」
「その声はクライン？」
「私もいるんだが！」
カガリは拗ねたように言った。
「鈴さん、早くお逃げ下さい」
「なっ、なんでよ！」

鈴も食い下がらない。
「お前のＩＳのシールドエネルギーが切れる前だろうが！死にたいのか！」
鈴は気をつけてね、と言って引き上げた。
キラ達の周りには雑魚はいなくなりあとは黒いＩＳだけとなった。
キラ達はビームライフルやオルトロスを撃つが黒いＩＳに当たる前に曲げられた。
「やっぱりか、みんなビームサーベルに持ち代えて」
とキラの指示が飛ぶ。アスラン達はビームサーベルを持ち攻撃した。
シンの活躍によってシールド発生機は破壊され、キラのフルバーストの餌食になり後ろに倒れた。時間は約五分。
それを見ていた一夏達は恐れを抱いた。

〈ＩＳ学園〉地下研究室
キラ達が破壊したＩＳが並ばされていた。
キラ達も集められた。
「さて、お前達が破壊したこのＩＳについて話してもらうぞ」
千冬は何時も以上に厳しい声で言った。
「では、僕が話します。灰色のＩＳはジンといいます。仮面を被ったＩＳはディンです。深緑のＩＳはゲイツです。最後に左肩にシールドがあるのはザクです。どれもＣ．Ｅ．のザフト軍の機体です」
キラが千冬に説明をしていた。
「じゃぁ、あの黒いＩＳはなんだ？」
今度はシンが話した。
「あの黒いＩＳはデストロイです。あれは、ザフト軍が作っていません。あれは地球連合軍が作った殲滅戦用の機体です」
シンは苦虫を噛んだような顔をした。シンはステラを思い出していた。
（もしステラが此処に来たら幸せに暮らせただろうに…）
キラはシンを見て目を背けた。シンが好きだったステラを殺したの

はキラだからだ。キラは声が掛け辛かった。
千冬はその後キラ達から事情聴取をし、キラ達を寮に帰らせた。

第五話（後書き）

なんかおかしいのは僕だけだろうか？

誤字脱字があったら教えてください。

第六話（前書き）

今回は余りキラ達は出ません。

第六話

次の日の夜、一夏の部屋が騒がしくなった。箒が部屋を移動になった為だった。
キラとアスラン、シン、イザーク、ディアッカは学園内を回っていた。後ろでは、再会をしたホーク姉妹、ミリアリア、カガリ、ラクスと一緒に歩いていた。
「しかし、ラクス様とカガリ様がこちらにいらっしたとは思いもしなかったです」
「わたくし達はキラに助けてもらっていたので大丈夫でしたよ」
ラクスはメイリンにエンジェルスマイルで言った。

後ろでは箒が一夏に告白をした。
「ら、来月の、学年別個人トーナメントだが……わ私が優勝したら———つ、付き合ってもらう！」
箒は頬を紅潮させ、言った。
「……はい？」なにが起きたのか分からなかった一夏であった。

翌朝、ＳＨＲ時間……山田先生の隣には四人の転校生がいた。
「シャルル・デュノアです。フランスから来ました」
そう言ってエンジェルスマイルでシャルルが話した。
「お、男……？」
誰かが呟く。
「はい。こちらに僕と同じ境遇の方達がいると聞いて本国から転入を———」
キラ、アスラン、シン、イザーク、ディアッカ、一夏、千冬は耳栓を三重にした。

「きゃ……」
「はい？」
シャルルは分からなかった。なぜ男子一同が耳栓をしたのかが、しかし、女子一同の黄色い声援を聞いて納得した。
「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁ――――っ！」
その時、教室は揺れた。
「男子！」「しかも美形」「守ってあげたくなる系」
一夏達は（女子は元気があってなによりだ）と思っていた。しかし、ラクスの目つきが変わった。キラは分からなかった。
その後、ドイツからきたラウラ・ボーデヴィッヒによって叩かれた。流石にキラ達も驚いた。

「あー…では、ＨＲを終わる。各自すぐに着替えて第二グランドに集合。今日は二組と合同で模擬戦闘をする。解散！」
千冬の号令によって女子達は着替えようとする。一夏達はシャルルと一緒に更衣室に向かった……しかし、各クラスの女子一同が向かってきた。
「あっ！転校生発見！」「しかも、男子一同が揃ってる」「者ども出会え出会えい！」
（待て。何時から此処は武家屋敷になった！）とツッコム、キラ達。何となく女子一同から逃げれた一夏達は早速着替えた。着替えの最中、シャルルが赤くなるところをキラ達（一夏以外）わかった。授業に何とか間に合った。なにやら一夏とセシリア、鈴が騒いでいたところを見つかり千冬による出席簿アタックが炸裂した。

「ではこれより格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する、今日は戦闘をしてもらう。鳳、オルコット！前に出ろ！」
千冬は鈴とセシリアの耳元で何かを言った。
やはり此処はイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコット

の出番ですわね！」
「まぁ、実力の違いを見せるいい機会よね！専用機持ちの！」
（こんなんでいいのか？代表候補生）
と思うキラ達（一夏以外）

キィィィン……
「あああーっ！ど、どいて下さい～っ！」
キラ、アスラン、シンはＩＳを展開した。そして落ちてくるＩＳをキャッチした。ＩＳに乗っていたのは山田先生だった。
「ありがとうございます。ヤマト君達」
キラ達は山田先生をゆっくり降ろした。
「では、鳳、オルコット。いつまで惚けている。さっさとはじめるぞ」
「え？あの、二対一で…？」
「いや、流石にそれは……」
鈴とセシリアは自分達が負けるとは思っていないらしい。
「安心しろ。今のお前達なら直ぐに負ける」
鈴達は負けるという言葉に反応し力が漲っていた。
「では、はじめ！」千冬の号令の下鈴達が飛翔した。山田先生も後に続いた。

「さて、デュノア。山田先生が使っているＩＳを説明をしろ」
千冬に指名されたシャルルは山田先生が使っているＩＳを説明した。
「山田先生が使用されているＩＳはデュノア社製『ラファール・リヴァイブ』です。第二世代開発最後期のＩＳですが、そのスペックは初期第三世代型にも劣りません――」
シャルルが続きようとしたが千冬に遮られる。
「ああ、一旦そこまでいい。……終わるぞ」
空中では、鈴とセシリアがぶつかったところに山田先生がグレネードを投擲し鈴達は墜落した。

女子一同はこれから山田先生に刃向かわないようにしようと思った。
授業は進み、少し時間が空いたので千冬はキラ達（一夏以外）の男子にＩＳの展開の指示をした。
キラはストライクフリーダム、アスランはインフィニットジャスティ、シンはデスティニー、イザークはデュエルＡＳＭＫ‐？、ディアッカはバスターＭＫ‐？を展開した。
イザークとディアッカの機体は、ＧＡＴシリーズを改良し以前の機体以上の攻撃性、機動性が上がっている機体だ。開発は、オーブ軍のモルゲンレーテとザフト軍との共同開発によって実現した。
五人は空に上がった。
「では試合開始！」
キラ達は模擬戦闘をした。バスターとデュエルの威力が上がっていたが、キラ達だって訓練を怠ってはいない。授業終了のチャイムが鳴るときにはデュエル、バスターはボロボロになっていた。

イザークがキラ達と歩いている後ろで一人の少女がイザークをじっと見ていた。

その日の夜、一夏とシャルルは同じ部屋になっていた。
シャァァァ――――
一夏が部屋に帰るとシャワーの音がした。
（シャンプーがもう切れてた気がする）
一夏は浴室の扉を開いた。しかし、一夏の目の前には女の子が立っていた。相手もびっくりしたように目を見開いた。
「シャ、シャルル。シャンプー此処に置いとくからな……」
「あっ、うん……」
金髪の女の子は、返事をした。一夏はシャンプーを置きすぐに出た。

一夏とシャルルはベットに座っていた。
「なんで男のフリなんかしていたんだ？」
「それは、その……実家の方からそうしろって言われて……」
「実家っていうと、デュノア社の――」
「そう。僕の父がそこの社長。その人から直接の命令なんだよ」
一夏にはシャルルの言っていることが分からなかった。
「一夏、僕はね愛妻の子なんだよ。引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんが亡くなったときにね、父の部下がやってきたの。それで色々と検査をする過程でＩＳ適応が高いことがわかって、非公式であったけれどデュノア社のテストパイロットをやることになってね……父に会ったのは二回くらい。会話は数回くらいかな。それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったの」
一夏には分からなかった。
「え？だってデュノア社って量産機ＩＳのシェアが世界第三位だろ？」
「そうだけど、結局リヴァイヴは第二世代型なんだよ。ＩＳの開発っていうのはものすごくお金がかかるんだ。フランスは欧州連合の統合防衛計画『イグニッション・プラン』から除名されているからね。第三世代型の開発は急務なの。国防のためもあるけど、資本力で負ける国が最初のアドバンテージを取れないと悲惨なことになるんだよ」
一夏はセシリアが言っていた第三世代型の開発について思い出した。
『現在、欧州連合では第三次イグニッション・プランの次期主力機の選定中なのですわ。今のところトライアルに参加しているのは我がイギリスのティアーズ型、ドイツのレーゲン型、それにイタリアのテンペスト？型。今のところ実用化ではイギリスがリードしていますが、まだ難しい状況なのです。そのため実稼動データを取るために、わたくしがＩＳ学園へと送られましたの』
「話しを戻すね。それでデュノア社でも第三世代型を開発していた

んだけど、元々遅れに遅れての第二世代型最後発だからね。圧倒的にデータも時間も不足していて、なかなか形にならなかったんだよ。それで、政府からの通達で予算の大幅カット、その上でＩＳ開発許可も剥奪するって流れになったの」
「なんとかなく話はわかったが、それがどうして男装に繋がるんだ？」
シャルルは苛立ちを隠せず言った。
「簡単だよ。注目を浴びるための広告塔。それに――――同じ男子なら日本で登場した特異ケースと接触しやすい。可能であればその使用機体とデータを取れるだろう……ってね」
一夏は確信した。
「それは、つまり――」
「そう、一夏やヤマトさん達のデータを盗んで来いって言われているんだよ。僕は、あの人にね」
一夏は、シャルルの父親が憎らしくなった。シャルルをただの“物”としか扱わない考えに対し怒りを覚えた。
「とまぁ、そんなところかな。でも一夏にバレちゃったし、きっと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は……潰れるか他企業の傘下に入るか、どのみちいままでのようには行かないだろけど、僕にはどうでもいいことかな」
一夏は黙った。
「ああ、一夏に話したらなんだか楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、今まで嘘をついてゴメン」
シャルルは深々と頭を下げた。一夏はシャルルの肩を掴んでいた。
一夏は畳み掛けるように言った。
「いいのか、それで」
シャルルは驚いたように目を見開いた。
「それでいいのか？いいはずないだろ。親が何だっていうんだ」
シャルルが戸惑いと怯えの表情で一夏の名前を呼んだ。

第六話（後書き）

次回もキラ達は出ないかも

誤字脱字があったら教えてください。

第七話（前書き）

遅くなりました。すみません。

第七話

シャルルは怯えたように一夏の名前を呼んだ。
「い、一夏……？」
一夏は言葉が止まらないのか、感情が噴き出した。
「親がいなけりゃ子供は生まれない。そりゃそうだろうよ。でも、だからって、親が子供に何をしてもいいなんて、そんな馬鹿なことがあるか！生き方を選ぶ権利は誰にだってあるはずだ。それを、親なんかに邪魔されるいわれなんて無いはずだ！」
一夏は感じた。この言葉は自分に対して言っているんだと……
「ど、どうしたの？一夏、変だよ？」
「あ、ああ……悪い。つい熱くなってしまって」
「いいけど……本当にどうしたの？」
一夏はシャルルにあることを話した。
「俺は――俺と千冬姉は両親に捨てられたから」
「あ……」
シャルルは知っていた。ＩＳ学園に来る前に見た資料に『両親不在』と書いてあったことを。しかし、その時は全く考えていなかった。そして今知った。
シャルルは一夏に謝った。
「その……ゴメン」
「気にしなくていい。俺の家族は千冬姉だけだから、別に親なんて今更会いたいとも思わない。それより、シャルルはこれからどうするんだよ？」
一夏はシャルルが心配で聞いた。
「どうって……時間の問題じゃないかな。フランス政府もことの真相を知ったら黙っていないだろうし、僕は代表候補生を降ろされて、よくて牢屋とかじゃないかな」
シャルルは諦めたように言った。

「だったら、此処にいろ」
シャルルは一夏が言った意味が分からなかった。
「特記事項第二一、ほん学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。また、本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとしる――――つまり、この学園にいれば、少なくとも三年間は大丈夫だろ？それだけ時間があれば、なんとかなる方法だって見つけられる。別に急ぐ必要だってないだろう」
「一夏、よく覚えられたね。特記事項って五十五個もあるのに」
「……勤勉なんだよ、俺は」
「そうだね。ふふっ」
シャルルは屈託のない普通の女の子に戻った。

翌日の朝
「そ、それは本当ですの？」
「う、嘘ついてないでしょうね！」
一夏達男子七人とカガリ達五人は教室の前で聞こえる声に耳を傾けた。ついでに、キラ達（箒、鈴、セシリア以外）はシャルル（シャルルもふくむ）が女の子だったことは一夏から聞いている。しかし、キラ達は知っていた。キラ達が入ったことに気付かないのか話しに集中している。
「本当だってば！月末学年別トーナメントで優勝したら織斑君達と交際でき―」
「俺達がどうしたって？」
一夏が声を掛けた瞬間逃げ出した。それに吊られてみんなは自分の席に戻った。
一夏はちんぷんかんぷんだった。キラ達は困っていた。

その日の放課後、セシリア、鈴は第三アリーナで模擬戦闘をしようとしていた。すると、キラ、アスラン、シン、イザーク、ディアッカと遭遇し練習に付き合ってもらうことになった。

キラ達五人の戦闘を見学していたセシリア達はついて行けないと思い、二人で練習をしていた。その時、セシリア達の間に砲弾が飛んできた。二人は緊急回避を行い、砲弾が飛んできたところをみた。そこには漆黒のＩＳ『シュヴァルツェア・レーゲン』がいた。二人は登録操縦者の名前を言った。

「「ラウラ・ボーデヴィッヒ」」

セシリアは武器を持ちラウラに向けた。鈴は衝撃砲の準備をしていた。

一方、キラ達はまだ練習中。セシリア達には目もくれない。

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か。……ふん、データで見た時の方がまだ強そうぢはあったな」

ラウラはセシリア達に挑戦的な言い方をした。それに対し鈴、セシリアはキレた。

「何？やるの？わざわざドイツくんだりからやってきてボコられたいなんて大したマゾっぷりね。」

「あらあら鈴さん、こちらの方はどうも言語をお持ちではないようですから、あまりいじわるのはかわいそうですわよ？犬だってまだワンと言いますのに」

ラウラは見下すように二人を見て、挑発をした。

「はっ……二人掛かりで量産機に負ける程度の力量しか持たぬものが専用機持ちとはな。よほど人材不足と見える。数くらいしか能のない国と古いだけが取り柄のはな」

プッチーン！

何かが切れる音がした。鈴、セシリアは装備の最終安全装置を外す。

「ああ、ああ、わかったわよ。スクラップがお望みなわけね」
「ええ、そうですわね！」
「はっ！二人掛かりで来たらどうだ？一足一は所詮二にしかならん。下らん種馬を取り合うようなメスに、この私が負けるか」

一方、キラ達は模擬戦闘を止めラウラ達を見ていた。先のことを見抜いて……

「――――今なんて言った？あたしの耳には『どうぞ好きなだけ殴って下さい』って聞こえたけど？」
「馬にいない人間を侮辱まですると、同じ欧州連合として恥ずかしい限りですわ。その軽口、二度と叩けぬようにここで叩いておきましょう」
しかし、ラウラには全く耳に入っておらず軽く流していた。
「とっとと来い」
「「上等！」」

一夏はシャルルと歩いていたとき、箒と出会い第三アリーナに向かった。
しかし、アリーナに来るに連れて混雑するようになった。
ドゴォンッ！
アリーナ内で爆発が起きた。黒煙から出て来たのは鈴とセシリアの二人だった。爆発の中心にはラウラのシュヴァルツェア・レーゲンだった。鈴達はＩＳアーマーの一部は完全に失われていた。しかしラウラのシュヴァルツェア・レーゲンは無傷だった。
鈴は衝撃砲を撃つがラウラに当たる前に弾かれた。セシリアはライフルを連射をした。しかし鈴と同じく弾かれた。

「無駄だ。このシュウ〝ァルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな」
「くっ！まさかこうまで相性が悪いだなんて……！」
ラウラは、セシリアの攻撃を避けながら鈴の懐に入りプラズマ手刀で攻撃をしようとした。しかしセシリアが間に入りミサイルを撃った。衝撃により床に叩き衝けられた。
「無茶するわね、アンタ……」
「苦情は後で。けれど、ダメージは……」
煙が晴れ、そこには無傷のラウラが立っていた。
「終わりか？ならば———私の番だ」
ラウラはイグニッションブーストを使い鈴を蹴り飛ばし、セシリアには至近距離から砲撃をした。ラウラによる一方的な暴虐が始まった。しかし、ワイヤーアンカーで鈴達に最後の攻撃をしようとしたがビームライフルによって遮られた。

第七話（後書き）

途中ですみません。

第八話

ビームライフルによって切られたアンカーはラウラのところに帰った。
「誰だ！」
ラウラはビームの軌道を辿った。そこにいたのはキラのストライクフリーダムだった。
「フルスキンだと！貴様は誰だ！」
「僕はキラ・ヤマト。このストライクフリーダムのパイロットだよ。アスラン、シン、セシリアさん達を避難させて、此処は僕で押さえるから」
「わかった。くれぐれも気をつけろよ」
アスランとシンはイグニッションブーストを使ってセシリア達を抱えてアリーナの端に避難し意識を確認をした。
「キラ、セシリア達は大丈夫だ」
「わかった。ありがとう、アスラン」キラはアスランとプライベートチャンネルで話した。ラウラは空気的な感じになったラウラはキラにレールカノンを撃った。しかし、キラは音速での弾をビームサーベルで断ち切った。
「サーベルで弾を断ち切った？しかしこれならどうだ！」
ラウラはアンカーをキラに放った。しかし、キラはビームライフルで全てのアンカーを撃ち落とした。ラウラはプラズマ手刀を展開しキラに向かった。キラもビームサーベルを展開しラウラに向かった。しかし、キラとラウラの間に一人の女性が入った。
「やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」
間に入ったのは千冬だった。しかし、ＩＳは装備されておらず素手で打鉄のブレードを持っていた。「模擬戦闘をやるのは構わん。しかし、アリーナを破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそう仰るなら」
ラウラは素直にＩＳを解除する。
「ヤマト達もそれでいいな？」
「判りました」とキラ達が頷きＩＳを解除する。
千冬は改めてアリーナを見渡して告げだ
「では、学年別トーナメントまで私闘を一切禁止する。以上、解散！」
千冬は強く手を叩く。まるで銃声のようにアリーナ全体に鋭く響いた。

ＩＳ学園〈保健室〉
「……」
「……」
キラ、アスラン、シンは一夏達に保健室に来るように伝えた。ベットにはセシリア、鈴が横になっていた。
「別に助けてくれなくてもよかったのに」
「あのまま続けていたら勝っていましたわ」
キラ達は苦笑いをしていた。セシリア達がキレていた理由を知っていたので（まだ本人は来ていないが…）
「お前らなあ……。はぁ、でもまあ、怪我もたいしたことなくて安心した」
シンがセシリア達に言う。
「まったくだ。もし俺達が介入しなかったら死んでたかもしれないぞ」

アスランも言う。
「本当だよ。次からは気をつけてね」
キラが最後に言った。

「セシリア、鈴大丈夫か！」
遅い主人公が登場した。後ろからは、シャルル、箒、ラクス達八人が続く。ドアに持たれてイザーク、ディアッカが見ていた。
「こんなの怪我のうちには入らな――いたたたっ！」
鈴は無理して体を動かすも全身の痛みに顔を歪めた。
「そもそもこうやって横になっていること自体無意味――――つううっ！」
セシリアも顔を歪めた。
（…。バカなんだろうか？）
一夏は心の中で呟いた。
「バカってなによバカって！バカ！」
「一夏さんこそ大バカですわ！」
セシリア、鈴が一夏に反撃した。一夏は声に出していない筈なのにセシリア達に聞かれて少しショックをうけた。そこに飲み物を買って来たシャルルが帰って来た。
「二人とも好きな人に格好悪いところを見られたから、恥ずかしいんだよ」
シャルルは小さめの声で言ったが、一夏以外聞こえていた。一夏は頭の上に?を出していた。
それもそのはず、セシリアと鈴は顔を赤く染めだし、怒りだした。
「ななな何を言ってるのか、全然わかんないわね！こここれだから欧州人は困るのよねえっ！」
「べべっ、別にわたくしはっ！そ、そういう邪推をされるといささか気分を害しますわねっ！」
二人は、怒りながら恥ずかしさに顔が赤くなっている。

シャルルから渡された飲み物を飲み干したとき保健室のそとから
ドドドドドドドドドッ……！
地鳴りが響き保健室のドアが吹き飛ぶ勢いで開かれた。
「織斑君、デュノア君、ヤマト君、ザラ君、ジュール君、エルスマン君、アスカ君これ！」
手渡されたのは学内の緊急告知文が書かれた申請書だった。内容は
『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため、二人一組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった場合は抽選で選ばれた生徒同士で組むとする』だった。

一斉に出てくる手、手、手
《私と一緒に組んで、織斑君、デュノア君、ヤマト君、アスカ君、ザラ君、ジュール君、エルスマン君！》
一夏とシャルルは動揺していた。そんなとき、キラが女子一同に話した。
「みんな、ゴメンね。一夏とシャルルは組むし、僕ら五人は参加を禁止されているんだ。だから僕等とは組めないよ」

キラが言ったことは本当である。何故なら、千冬からの命令だった。
『お前達五人は参加を禁止する。お前達が参加をしたら学年誰も勝てないからな』という理由だった。

女子一同はキラの説明を聞き諦めて寮に戻って行った。

「一夏っ！」
「一夏さんっ！」
シャルルが声を掛けようとしたとき鈴、セシリアによって遮られた。
セシリア、鈴はベットの布団を剥がして一夏に迫った。
「あ、あたしと組みなさいよ！幼なじみでしょうが！」

「いえ、クラスメイトとしてここはわたくしと！」
一夏は迷っていた。その時、後ろから声がした。
「ダメですよ」
キラ達は驚かなかったが、一夏、シャルル、セシリア、鈴は驚いた。
「おふたりのＩＳ状態はレベルＣにまでいっています。当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。ＩＳを休ます意味を込めてトーナメント参加は許可できません」
いつにもなく厳しい山田先生をみて一夏達は驚いた。セシリアと鈴はなんだか不満ではあるも納得していた。

山田先生も職員室に戻り、一夏は疑問をセシリアに聞いた。
「しかし、なんでラウラと戦うことになったんだ？」
「え、いや、それは……」
「ま、まぁ、なんと言いますか……女のプライドを侮辱されたから、ですわ」
一夏もなんだかんだで納得した。しかし、シャルルは爆弾を落とした。
「もしかして、二人とも一夏のことが……」
最後まで言おうとするもセシリア、鈴に遮られた。否、塞がれた。
「あああーっ！デュノアは一言多いねぇ！」
「そ、そうですわ！まったくです！おほほほほ！」
セシリアと鈴は急いでシャルルの口を押さえた。

「コラコラ、やめろって。シャルルが困ってるだろうが。それにさっきからケガ人のくせに体を動かしすぎだぞ。ホレ」
一夏はセシリア達の肩を触った。
『ピグッ！！』
変な声とともにセシリア、鈴はベットに戻り一夏を睨み付けた。目尻に涙を溜めて。最後にセシリア達はありったけの声で叫んだ。
『とっとと出てけぇー！』

一夏は逃げるように保健室を後にした。

第八話（後書き）

（。д。；）

第九話（前書き）

ぐだぐだですみません。（▽；）

第九話

ＩＳ学園から一隻の戦艦が出航した。白亜の戦艦「アークエンジェル」
アークエンジェルは、単独で動いていた。勿論、千冬の許可を取ってからだ。アークエンジェルは、潜水機能を持っているため見つかりにくい、そしてオーブ連合首相国所属「アークエンジェル」から正式にＩＳ学園所属戦闘母艦「アークエンジェル」になっているため攻撃はされない。
「では、織斑先生。キラ君達をお願いします。」
アークエンジェル艦長マリュー・ラミアスはモニター越しに千冬に挨拶をした。
「ラミアス艦長こそ、無事に帰って下さることを祈っています」
千冬もマリューに挨拶をした。
「アークエンジェル、発進します。発進後潜水し『オーブがあった』場所に行きます。機関最大、全速前進」
そして、アークエンジェルはＩＳ学園を立ち去った。

〈こちら、ＩＳ委員会所属ＩＳ補給空母艦「ガーティ・ルー」艦長タリア・グラディスです。ＩＳ委員会応答お願いします〉
「こちらＩＳ委員会。『ガーティ・ルー』どうぞ」
『ガーティ・ルーの着艦許可をお願いします』
『ガーティ・ルー、着艦許可します。七番に着艦して下さい』

〈ガーティ・ルー〉艦長タリア・グラディスは管制の指示に従い七番に停泊した。
まさか、自分が死んだと思ったら白い光に包まれレイ、ギルバートと共にここ、『ＩＳ委員会』にいた。そして、ラウ・ル・クルーゼに出会い、ファントムペインの三人ステラ、スティング、アウルと共にＩＳ補給空母艦『ガーティ・ルー』の艦長としてある組織〈ファントムタクス〉を追っている。しかし、まだ手掛かりはなく先日はイギリスの第三世代機『サイレント・ゼフィルス』を奪取された。そして昨日にはアメリカの第二世代機『アラクネ』も奪取された。

現在、ＩＳ委員会の所有する機体はフランスの第二世代機『ラファール・リヴァイヴ』、日本の第二世代機『打鉄』、同じく日本の第二世代機『天』（アマツ）の各十機ずつそして、ラウの専用機『プロビデンスＭＫ－？』、レイの専用機『レジェンドＭＫ－？』、ステラの専用機『ガイアＭＫ－？』、スティング専用機『カオスＭＫ－？』、アウル専用機『アビスＭＫ－？』を所有している。そして、ＩＳ補給空母艦『ガーティ・ルー』、ＩＳ補給戦闘母艦『ヤマト』を所有している。今は、タリア達は一休みという形でＩＳ委員会のある島に着艦している。

第九話（後書き）

感想、誤字脱字があったら教えてください。

機体設定

機体設定

パイロット
キラ・ヤマト

機体
ＺＧＭＦ-２０Ａストライクフリーダム

武装
ビームライフル　二丁
ビームサーベル　二本
レールガン　二門
スキュラー　一門
ビームシールド　二枚
機動兵装ドラグーンシステム　八機

ワンオフアビリティー
フルバースト

〔セカンドシフト無し〕

パイロット
アスラン・ザラ
機体
ＺＧＭＦ-１９Ａインフィニットジャスティ
武装
ビームライフル　一丁
ビームサーベル　二本
機動兵装ファトゥス０２
ビームシールド　一枚
ワイヤーアンカー　一本
ビームブーメラン　二本
ビームブレード　一本
短ビームサーベル　二本
ワンオフアビリティー
？？？？？
〔セカンドシフト無し〕
パイロット

シン・アスカ

機体

ＺＧＭＦ-Ｘ４２Ｓデスティニー

武装

ビームライフル　一丁

対艦刀　一本

ビームブーメラン　二本

長射程ビーム砲　一門

パルマ・フィオキーナ　二門

ビームシールド　二枚

ワンオフアビリティー

？？？？？

〔セカンドシフト無し〕

パイロット

ラクス・クライン

機体

ＺＧＭＦ-Ｘ１０Ａフリーダム

武装
ビームライフル　一丁
ビームサーベル　二本
プラズマ収束ビーム砲　二門
レールガン　二門
ビームコーティングシールド　一枚
ワンオフアビリティー
フルバースト
〔セカンドシフト無し〕

パイロット
カガリ・ユラ・アスハ

機体
ＯＲＢ－０１アカツキ

武装
〈基本武装〉
ビームライフル　一丁
ビームサーベル　二本
〈オオワシ武装〉

高エネルギービーム砲　二門

〈シラヌイ武装〉

機動兵装ドラグーンシステム　七機

ワンオフアビリティー

ヤタノカガミ

〔セカンドシフト無し〕

パイロット

ルナマリア・ホーク

機体

ＺＧＭＦ-１０００ザクウォーリア

武装

〈基本武装〉

ビーム突撃銃　一丁

ビームトマホーク　一本

炸裂弾　三発

焼夷弾　三発

閃光弾　三発

発煙弾　三発

〈A1武装〉
高エネルギー長射程ビーム砲　一丁

〈M武装〉
誘導ミサイル　二門

〈グフイグナイデット武装〉
四連装ビームガン　一門
スレイヤーウイップ　一本
ビームソード　一本

〈K武装〉
ガトリングビーム砲　二門
ビームアックス　一本

ワンオフアビリティー
無し

〔セカンドシフト有り〕

パイロット
ルナマリア・ホーク

機体
ZGMF-X56Sインパルス

武装

〈基本武装〉

対装甲ナイフ　二本

ビームライフル　一丁

機動防盾　一枚

〈フォース武装〉

ビームサーベル　二本

〈ソード武装〉

対艦刀　二本

ビームブーメラン　二本

〈ブラスト武装〉

高エネルギー長射程ビーム砲　二丁

高初速レール砲　二門

ミサイルランチャー　二門

誘導ミサイル　四門

ビームジャベリン　一本

ワンオフアビリティー

？？？？？

戦艦設定

ＩＳ学園所属補給戦闘母艦アークエンジェル

艦長

マリュー・ラミアス

副官

ムウ・ラ・フラガ

武装

対空防御機関砲イーゲルシュテルン　十六門

陽電子破城砲ローエングリン　二門

高エネルギー収束火線砲ゴッドフリートＭＫ－７１

二門

リニアカノンバリアントＭＫ－８　二門

対空防御ミサイルヘルダート　十六発

艦尾大型ミサイル　十二発

潜水可能

大気圏突入可能

ＩＳ学園所属補給母艦エターナル

艦長
アンドリュー・バルトフェルド

副官
マーチン・ダコスタ

武装
高エネルギー収束ビーム砲　一門
自動近接防御機関砲　十六門
対空防御ミサイル　十九門
特殊武装ミーティア　二門

カタパルト
船首、船尾

大気圏突入可能

潜水機能無し

ＩＳ学園所属補給戦闘母艦ミネルバ

艦長
アーサー・トレイン

副官
ディアッカ・エルスマン
武装
陽電子砲タンホイザー　一門
トリスタン　二門
高エネルギー収束ビーム砲イゾルデ　二門
対空ガトリング砲　十門
対空ミサイル　二五発
迎撃ミサイル　二五発
魚雷　二五発
カタパルト
船首、左舷、右舷
潜水機能有り
大気圏突入可能

第十話（前書き）

指摘があったので修正します。

第十話

C．E．79年、その日ある世界が消えた。
ザフトのプラント、地球、月が時空間変動によって跡片も無く、だだの『無』の世界になってしまった。しかし、プラント、月、地球はある世界に飛ばされてしまった。その世界は『インフィニットストラトス』通称『IS』。
ザフトのモビルスーツ、オーブ連合首相国のモビルスーツは全てISになってしまった。戦艦は通常の半分の大きさにたり、全身装甲『フルスキン』という形になった。そして、ザフトは地球に降下すれため準備を開始した。目標座標は地球、日本、『IS学園』に決まった。

夕食事、シャルルはキラ、アスラン、シン、イザーク、ディアッカ、一夏と一緒に食事をしていた。
「あ、あのね、一夏っ」
シャルルが突然口を開いた。
「おう？」
一夏はどうしたんだろうと頭に？を出していた。
「あの、遅くなっちゃったけど……助けてくれてありがとう」
「ん？俺何かしたか？どっちかというと俺がアリーナで助けてもらった方だと思うんだが」
一夏はラウラの件を思い出していた。
「そっちじゃなくて、ほら保健室で。トーナメントのペアを言い出してくれたの、すごく嬉しかった」
一夏はなんだそんなことか…と思っていた。

「ああ、アレか。まぁ、気にするなよ。事情を知っているのは俺達しかいないし、サポートするのは当然だろ？」
一夏は特別なことでもないらしいが、シャルルは違う。熱心に一夏に感謝の意を示そうとしている。
「そんなことはないよ。それが自然と出来るのは、一夏が優しいからだよ。誰かのために自分から名乗り出せるなんて、すごく素敵なことだと思うよ。それに僕はすごく嬉しかったよ」
一夏は感心していた。さすがはブロンドの貴公子。選ぶ言葉ひとつひとつに品があると、ついでに、一夏は少し照れていた。あまり人から褒められたことがないため少し赤くなった頬をパタパタと手で扇いだ。
「い、一夏っ！その僕の口調って変じゃないかな？」
シャルルは自分の口調が変じゃないかと思っていた。一夏にバレ、キラ達にも知られたし口調を『僕』から『私』に変えようかと悩んでいた。
「ん？自分のことを『僕』と言うことか？特に変じゃないし、かわいいと思うぞ」
「か、かわいい……？僕が？ほ、本当に？ウソついていない？」
その後、シャルルはキラ達と別れ、自分達の部屋に戻った。
一夏はシャルルが食事中に聞いたことを考えていた。いきなりどうしたんだろうかと不信に思うも着替えようとする。しかし、シャルルは女の子。一夏は外に出ようとしていた。
「一夏、どうして外に出ようとしているの？」
「いや、俺がいたら着替えられないだろ？ＩＳスーツの着替えも難儀していたしさ、しばらく部屋から出てるよ」
「い、いいよ、そんなの。それに……ほら！男同士なのに着替え中は部屋の外に出たりしたら、変に思われちゃうでしょ？」一夏はなんとしても部屋から出ようとするも、シャルルは女の子の必殺技「涙目で下から睨む」を使い一夏を折らせた。

するっ……とズボンを脱ぐ音がした。
（う、マズイ……。なんか甘い匂いがする……）
一夏はなんとか理性を保とうとする。
「キャンッ！」
子犬の鳴き声が聞こえたと思い一夏は後ろを振り返った。
「え？」
『え？』
一夏の目線にはシャルル……基、シャルロットがズボンを膝下までで引っ掛かり、ズボン以外は下着……女性のパンツだけの状態なのだ。しかも、体勢はお尻を突き出した四つん這い状態。形のいいお尻にキュッと食い込んだ淡いピンクのパンツは、何と言うかエロい――
「キャ――」
一夏はシャルロットの叫びを止めようとダイブする。しかし、シャルロットの手前で転んでしまった。そして、一夏の記憶はそこで止まってしまう。

シャルロットは一夏をベットに移した。そして、一夏の額にキスをして自分も眠りに就いた。

第十話（後書き）

しんどい（。д。；）

機体設定？（前書き）

少し武装を多くしたりしています

機体設定？

機体設定？

パイロット
イザーク・ジュール

機体
ＧＡＴ－Ｘ１０２デュエルＡＳＭＫ－？

武装
〈基本武装〉
ビームライフル　二丁
ビームサーベル　二本
ビームコーティングシールド　一本

〈ＡＳ武装〉
レールカノン　一門
レールガン　二門
ミサイルポット　一門

パイロット
ディアッカ・エルスマン

機体
ＧＡＴ－Ｘ１０３バスターＭＫ－？

武装
超電滋散弾銃（レールショットガン）　一丁
ビームライフル　一丁
ミサイルポット　二門
レールカノン　二門
アーマーシュナイダ　二本

パイロット
ムウ・ラ・フラガ

機体
ＧＡＴ－Ｘ１０５ストライクＭＫ－？

武装
〈基本武装〉
イーゲルシュテルン　二門
ビームライフル　二丁
ビームコーティングシールド

一枚

アーマーシュナイダ　二本
〈エール武装〉
ビームサーベル　二本
レールガン　二本
〈ランチャー武装〉
アグニ　一丁
ミサイルポット　二門
ガトリング砲　一門
〈ソード武装〉
シュベルトゲーベン　一本
ビームブーメラン　二本
ビームアンカー　一本
〈I・W・S・P〉
レールキャノン　二門
ビーム砲　二門
ビームライフル　一丁
コーティングシールドガトリング付き　一枚
斬機刀　二本

〈ノワール武装〉
ビームガン　二丁
レールガン　二門
ビームブレード　二本
ワイヤーアンカー　六本
〈アカツキ武装〉
ビームライフル　二丁
ビームサーベル　二本
ビームコーティングシールド　一枚
高エネルギービーム砲　二門
反射システム（ヤタノカガミ）
誘導機動兵装システム（ドラグーン）

パイロット
ステラ・ルーシェ

機体
ＺＧＭＦ‐Ｘ８８Ｓガイア　ＭＫ‐？

武装
〈ＭＳ〉

ビームライフル　一丁
ビームサーベル　二本
ビームコーティングシールド　一枚
〈MA〉
ビーム突撃砲　二門
ビームブレード　二本
レールガン　二門

パイロット
スティング・オークレー

機体
ZGMF-X24SカオスMK-?

武装
〈MS〉
ビームライフル　二丁
ビームサーベル　二本
ビームクロウ　二本
機動兵装ポット　四機

誘導ミサイル　四門
〈MA〉
ビームライフル　一丁
機動兵装ポット　四機
ビーム突撃砲　四門
誘導ミサイル　四門

パイロット
アウル・ニーダ

機体
ZGMF-X31SアビスMK-?

武装
〈MS〉
複相ビーム砲　六門
レールキャノン　四門
スキュラー　三門
誘導魚雷　四門
ビームランス　一本
〈MA〉
レールキャノン　四門

誘導魚雷　四門

パイロット
ラウ・ル・クルーゼ

機体
ＺＧＭＦ-Ｘ１３Ａプロヴィデンス ＭＫ-？

武装
高エネルギービームライフル　一丁
ビームシールド　二枚
ビームクロウ　二本
誘導機動兵装システム（ドラグーン）
レールガン　二門

パイロット
レイ・ザ・バレル

機体
ＺＧＭＦ-Ｘ６６６Ｓレジェンド ＭＫ-？

武装
ビームライフル　一丁

ビームシールド　二枚
ビームジャベリン　二本
誘導機動兵装システム（ドラグーン）
レールガン　二門

ＩＳ委員会所属補給空母艦〈ガーティ・ルー〉
艦長
タリア・グラディス
副官
ラウ・ル・クルーゼ
武装
自動近接防御機関砲イーゲルシュテルン十六門
高エネルギー収束砲ゴッドフリート　四門
リニアカノンバリアントＭＫ‐８　二門
対空防御ミサイルヘルダート　二門
陽電子砲ローエングリン　二門
〈カタパルト〉

船首　二本

機体設定？（後書き）

頭がイタイ

第十一話

薄暗い部屋で男二人が会議をしていた。一人はワインを片手に持っており、もう一人は薄気味悪く笑っていた。
「アズラエル、奴らは本当にあそこにいるんだな？」
「ああ、作戦を始動しようか」

そして、二人はそれぞれ違う扉から出て行った。
「さぁ、消えてもらうぞ。アークエンジェル」
ジブリールは薄気味悪く自分の部屋に入っていった。

「カラミティ、ホビデゥン、レイダー時間です。今回は捕獲はしず破壊してくれて結構です」
アズラエルはカラミティ、ホビデゥン、レイダーのパイロット達に話した。

太平洋に浮かぶ一隻の空母があった。ファントムペインの船〔ジョーンズ〕そこから三機のＩＳがある場所に向かった。三機は〔ＩＳ学園〕がある日本に向かって行った。

六月も最終週に入り、ＩＳ学園は月曜日から学年別トーナメント一

色に変わる。その慌ただしさは予想よりも遥かにすごく、今こうして第一回戦が始まる直前まで、全生徒が雑務や会場の整理、来賓の誘導をしていた。

「しかし、すごいなこりゃ……」
更衣室のモニターを見ていた一夏、シャルル、キラ、アスラン、シン、イザーク、ディアッカは驚いていた。なぜなら、そこに映っているのは各国政府関係者、研究員、企業エージェントなど諸々の顔ぶれが一堂に揃っていたからだ。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認に来ているし、一年には今のところは関係はないけど、それでもトーナメント上位入賞者には早速チェックが入ると思うよ」
シャルルの説明があった。
「ふーん、ご苦労なことだ」
一夏には関係しないだろうと考えていた。
「一夏はボーデヴィッヒさんとの対決しか頭にないみたいだね」
キラが口を開く。
「まあ、な」
一夏は鈴、セシリアのことを考えた。二人ともトーナメントには参加出来ず、今回は辞退せざる得ない状態になっていた。二人は国家代表候補生であり、専用機持ちである。それがトーナメントどころか参加すらできないというのは、恐らく二人の立場を悪くする要因になる。
「自分の力を試せないのは二人とも辛いだろうな」
アスランも話す。
「感情的にはなるなよ一夏。あいつは恐らく俺やキラさん、アスラン、ジュール隊長、エルスマン副官以外では一年最強だと思う」
シンが一夏、シャルルにアドバイスをした。

「さて二人とも準備は大丈夫かい？」
キラがシャルル、一夏に聞いた。
「こっちは大丈夫だよ。一夏は？」
シャルルはキラに答え一夏に聞いた。
「ああ、こっちも大丈夫だ」
一夏も準備が整ったようで答えた。
「そろそろ対戦発表がある筈だよ」
キラが一夏達に伝えた。
そして対戦が発表された。それを見た一夏達は驚いた。

第一回戦
織斑　一夏、シャルル・デュノアペア
VS
ラウラ・ボーデヴィッヒ、ルナマリア・ホークペア

番外編（前書き）

何と無く作ってみました。

番外編

始まりました。何と無く作ってみた番外編……o（≧∇≦）o

此処では、作者である鉄槌の騎士が主役で進めて行きます。ゲストは、「インフィニットストラトス〈こんなのアリですか？神様〉」より山根幸一君が来てくださいました。

幸一「はじめまして、山根幸一です」

鉄槌「いやぁ、しかし我ながら設定が甘い気がするんだが、幸一君としてはどうですか？」

幸一「そうだな。やっぱり駄作者だけに設定が甘いのはしかたがないかな」

鉄槌「（。д。；）」

幸一「顔文字で現さないで……。今の俺の状態を顔文字で表すと（｀▽´；）こんな感じです…」

鉄槌「まさかそこまで言われるとは思わなかったゼット！」

幸一「うざいぅ（ｖ□´”）マジうざい。お前は二回死ねぇ！」

ドカッ、ガツッ、ババババババババババババババババババババ、カランカランカラン

幸一「死んだか？」

鉄槌「残念、無念、また来年（^ー^）／まだ死んでないぴょ～ん」
カッチーン！

幸一「風穴をブチ空けたる！」

鉄槌「ギャャャャャャャャャャャャャャッ」
キラーン（^ー^）／

幸一「やっと星になったか？さっぱりした……（。д。；）」

鉄槌「ただいまε＝（ノ。ー。）ノ」

幸一「（。д。；）」

鉄槌「さてと、幸一君には帰って頂きました。ありがとう、そしてありがとう。君の死はムダにはしないよ……遠くから（死んでへんわボケッ！）と聞こえるのは気のせいかな？まぁいいや。うん、大丈夫。次回予告でもしようかな？
次回は、一夏がラウラと戦います。しかし、そこに現れる謎のＩＳ。敵か味方かどちらかはわからないが次回をお楽しみに、あと、誰かスポンサー的な人を探しています。自分のユーザー名と読んでほしい小説一冊を教えてください。後書きで載せさせ頂きます。
これからも、インフィニットストラトス～英雄達此処に集うをよろしくお願い申しあげます。（＾∀＾）ノ」

番外編（後書き）

しんどい（ー・ー；）

第十二話

「一回戦で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」
「そりゃ何よりだ。こっちも同じ気持ちだぜ」
試合開始のベルが鳴り響いた。

『叩きのめす』

一夏とラウラは一気に間合いを摘めた。一夏は雪片弐型でラウラを切り付けようとする。しかし、ラウラに当たる寸前に見えない壁に当たり体が動かなくなった。そしで一夏はキラに教わったことを思い出す。

『ＡＩＣ？なんじゃそりゃ？』
一夏はキラに聞いた。
『ＡＩＣはシュヴァルツェア・レーゲンの第三世代型兵器だよ。アクティブ・イナーシャル・キャンセラーの略。要するに慣性停止能力のこと』
キラは一夏に詳しく教えた。
『ふーん』
一夏はいまいちわかっていなかった。『一夏、ＰＩＣはさすがにわかっているな』
今度はアスランが聞いた。
『……知らん』
アスランは頭を抱えた。
『あ、あのなぁ、……。基本だ基本。ＰＩＣは全てのＩＳに付いている。パッシブ・イナーシャル・キャンセラーの略だ。覚えておけ。

ＰＩＣのおかげで浮遊、加速、停止をしている』
今度はシンが教えた。
『あっ！何処かで聞いたことがあると思ったらそれか』
一夏は思い出すかのように言った。
それを聞いたキラ、アスラン、シン、イザーク、ディアッカ、シャルル達は呆れていた。
その後、キラ達は一夏とＡＩＣの対策を考えたが、ＡＩＣを破る対策は出なかった。

「くっ……！」
一夏は力押しで慣性停止能力を破ろうとするが意味がなかった。
「開幕直後の先制攻撃か？判りやすいな」
ラウラは冷静に一夏をなじった。
「……そりゃどうも。以心伝心でなによりた」
ガキン！と巨大なリボルバーの回転音が轟き、白式のハイパーセンサーが警告を発する。
――――敵ＩＳの大型レールカノンの安全装置解除を確認。初弾装填――警告！ロックオンを確認――――警告！――――
「させないよ」
後ろからシャルルの声が聞こえる。
シャルルは、一夏の上を飛びラウラのカノンを破壊した。
「ちっ……」
肩についてあるカノンは破壊され、シャルルによるサブマシンガンの雨を受けた。しかし、ラウラは後ろに下がった。
「逃がさないよ！」
シャルルは左手にアサルトライフルを持ちラウラに攻撃する。
シャルルの得意技「ラピットスイッチ」により攻撃でラウラは自然に追い込まれていた。
上では、ルナマリアがＩＳ「ザクウォーリア（Ａ１）」装備で一夏

達の戦いを見ていた。しかし、ルナマリアはまだ動かなかった。なぜなら、ラウラとの相談でラウラの旗色が悪くなるまで待機する。と決めていた。

ＩＳ学園上空では、三機のＩＳが待機していた。緑色のＩＳ「ＧＡＴ-Ｘ１３１カラミティＭＫ-？」　大鎌を持ったＩＳ「ＧＡＴ-Ｘ２５２フォビドゥンＭＫ-？」　鉄球を持っているＩＳ「ＧＡＴ-Ｘ３７０レイダーＭＫ-？」
どれもＣ．Ｅでキラ達によって破壊された機体である。
「作戦っていつはじまんの？」
フォビドゥンのパイロットは他の仲間に言った。
「始まったら全部潰すもんね」
レイダーのパイロットが言った。
「皆さん。始めましょうか？ファントムペインの力を世界に見せ付けましょう」

ルナマリアは長射程ビーム砲を構え一夏達を攻撃しようとした。

しかし、上から爆発しドームの破片がルナマリアの乗るＩＳに当たりシールドエネルギーが無くなった。爆発と共に降りたＩＳは一夏、シャルル、ラウラに攻撃した。一夏は反射が遅れ被弾した。シャルルはなんとか反応するも少し被弾した。ラウラも反応が遅れ被弾した。
一夏はシールドエネルギーが無くなり、強制解除された。ラウラは何とかシールドエネルギーは残っていた。

ＩＳ学園アリーナ管制室では、キラ、アスラン、シン、イザーク、ディアッカ、ラクス、カガリがアリーナに行こうとしていた。
「待てっ！おまえらは何処に行く」
千冬はキラ達に聞いた。
「あの三機は一夏達では相手になりません。逆に殺されます」
キラが少しキレながら言った。
「お前達でも相手にならないのでは？」
千冬は聞いた。
「あの三機は昔戦ったことがあります。大丈夫です」
キラはそのまま出て行った。

「はぁぁぁぁっ！撃滅！」レイダーは口にあるスキュラーで観客席を攻撃した。しかし、シャルルはシールドで弾いた。
「オラオラ！きえろ！」
カラミティーが肩にあるビーム砲を撃つ。狙いはラウラで、ラウラは反応が遅れビーム砲をまともに喰らった。ラウラも強制解除された。
「うざいんだよ。消えな！」
フォビドゥンは鎌でシャルルを切り付けた。シャルルも強制解除され三機はとどめとしてスキュラーを構えた。

第十二話（後書き）

しんどい（▽；）助けて

第十三話（前書き）

ヤバイ……誰か助けて（。д。；）

早速ですが、スポンサーさんが来ました。ありがとうございます。

豪商院影正様より「機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　Ｚ．Ｏ．Ｅ．～ｔｈｅ　ｂｌｕｅ　ｂｉｒｄ」です。皆さん読んで下さい。

豪商院影正様ありがとうございます。これからも、スポンサーを待っています。

では、本文をどうぞ！

第十三話

カラミティ、フォビドゥン、レイダーの三機は一夏、ラウラ、ルナマリア、シャルルにスキュラーを向ける。

刹那、カラミティ達と一夏の間に緑色のビームが入る。

「あぁーん？」

「誰だよ」

「なんだよ」

カラミティ、フォビドゥン、レイダーのパイロットは上を見る。そこにいたのは白いボディー、腹部にはスキュラー、八枚の羽、関節部は金色、二丁のビームライフル、腰部にはレールガン――そして昔に出会った機体に似ている。そうかのヤキン・デゥーエ戦を生き抜いた機体「ＺＧＭＦ-Ｘ１０Ａフリーダム」に似ている。否、フリーダムの二代目「ＺＧＭＦ-Ｘ２０Ａストライクフリーダム」そしてそのパイロット「キラ・ヤマト」はそこにいた。

ＩＳ学園カタパルトデッキ

「カガリ、今すぐにアークエンジェルに向かって。アスランもカガリの護衛として付いて行って。」

キラはカガリ、アスランにアークエンジェルに向かうように言った。

「しかし、キラ！此処はどうする。シンもいるが、イザークやディアッカの機体はアークエンジェルにいて戦力としては……」

キラはカガリの説得の途中で抱き着いた。

「カガリ、僕は君の弟であり君は僕の姉なんだ。少しは我が儘を言わせて……ね」
キラはカガリから離れ、アスランの顔を見つめた。
「アスラン、僕の姉をよろしくお願い」
キラはそう言うと、カタパルトデッキから出て行った。

第十三話（後書き）

スポンサー待っています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5089x/

インフィニットストラトス～英雄達此処に集う

2011年11月26日19時58分発行